

創立50周年「形」の稽古日設け自分磨く

全日本剣道道場連盟 思斉館

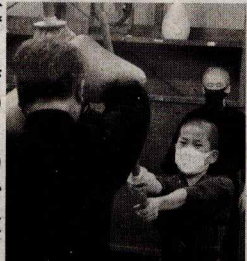
神奈川・厚木市で活動する思斉館道場。館長の滝澤建治氏(同県剣道道場連盟会長)が目指す剣道は「試合に勝つためではなく自分を磨くための剣道」だ。木曜日を「形」だけの稽古日としているのが同館の特徴。前半は木刀稽古法と日本剣道形、後半は一刀流中西派の形を大人と子供30人ほどが稽古する。基本の練習日は水・木・土曜(火・日は自主参加)。小、中、高、一般の計約60人を時間帯で分け、全員が感染防止のガイドラインを守りマスク着用で稽古に臨む。

「思斉館は今年、創立50周年でしたがコロナ禍で記念事業も行えず3カ月の休館。再開にあたっては12カ所の窓を全開し換気扇を増設、排気7台、吸気4台で常に新鮮な空気に入れ替える工夫をしています」と同館長。

また、剣道場内の壁には世界地図が。そこには館長の実父で初代館長(光三氏)の熱い思いが込められている。「世界に羽ばたく人になりなさい。そのためには日本固有の文化を知ることでも大事」との教えだ。初代は世界を飛び回り剣道指導

を實踐。同館長も遺志を継ぎ、親子2代での海外指導を今も行っている。

「今年はさまざまな大会が中止になった。神奈川の道場連盟では、秋に小6と中3を対象にした県大会の開催が検討されている。できればこの子たちに『我慢して頑張ってきてよかつた』と思わせてあげたい」と語る。



形の稽古をする石井良就君(小5)。それを見守る滝澤館長

